

研究推進校事業報告書

〈取組と成果のポイント〉

本校では、児童が自己肯定感を高め、多様な価値観に触れる道徳教育を推進した。

○児童の対話力向上に向けた取組

円形の座席配置で対話する「まるっと道徳」を全校で実施した。全員が顔を見合わせて、率直な意見を出し合える心理的安全性を構築したことで、仲間の考えに共感し、自己理解と他者理解を深める土台となった。

○教員の授業力向上に向けた取組

ホワイトボードを活用した教材分析を行った。検討会を教材分析から模擬授業まで3段階に分け、全員の知恵を可視化して繋ぐことで、質の高い授業案を構築する体制を確立した。これにより、教員の教材分析力と授業構想力の向上に繋がった。

○家庭・地域との連携

「親子道徳」や地域のゲストティーチャーを招いた授業、家庭や地域からの「ほめほめメッセージ」の掲示など、学校・家庭・地域が一体となった教育活動を展開した。一連の取組により、児童は多角的な視点から自己の生き方について考え、家庭や地域に大切にされている実感を深める成果が得られた。

1 研究推進校の概要

学 校 名	所 在 地	電 話 番 号	児童数	備 考
稲沢市立小正小学校	稲沢市小池正明寺町 東川田4100番地	0587(23)2424	486人	

本校は稲沢駅近くに位置し、校区には大きな通りや多くの企業、施設がある。また、地域の方々は大変あたたかく児童を見守り、様々な教育活動に協力的である。これらの特長を生かし、本校では、学校教育目標を「生涯にわたって学び続ける力を身に付け、心豊かで、たくましく生きぬく児童の育成をめざす」とし、多様な活動を取り入れながら、児童の豊かな心を育む実践に取り組んでいる。校訓「考える 心やさしい 丈夫な子」のもと、めざす児童像を「よく考える子・工夫する子（確かな学力）」「助け合う子・きまり正しい子（豊かな心）」「命を大切にする子・がんばりぬく子（健やかな体）」とし、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、地域の特色を生かし、地域の方々と教職員が連携を図りながら、全校体制で継続した教育活動を行っている。

2 研究課題

令和6年度に行った全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査では、「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか。」という質問に対し、43.5%(全国比-3.8・県比-3.0)であった。これは、「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。」という質問に対する回答{「当てはまる」29.0%(全国比-1.3・県比-0.2)}と並んでかなり低い割合だと言える。

また、本校児童の特徴として、与えられた課題に対しては粘り強く取り組もうとする児童が多い一方で、失敗を恐れずに挑戦していこうとする主体性には、やや欠ける実態が見られる。これは、先の質問紙調査における「自分には、よいところがあると思いますか。」という質問に対する回答{「当てはまる」39.1%(全国比-4.3・県比-1.3)}や、「将来の夢や目標を持っていますか。」という質問に対する回答{「当てはまる」

39.1%(全国比-21.5・県比-18.9)}にも、少なからず反映されていると考えられる。さらに、学校独自に行ったアンケートから、低学年は、友達の意見を聞いて考えを広げられないこと、中学年は、地域・家庭や友達からほめられる経験が少ないこと、高学年は、クラス全体での話合いや地域行事へ参加することへの意識が低いことが分かった。また、教職員は、授業づくりへの自信がないだけでなく、家庭や地域との連携を意識した授業を行うことへの意識が低いことが分かった。

こうした実態を踏まえ、児童が道德の授業の中で自分の考えを深めたり、進んで話し合ったりすることができ、「自分と違う意見について考えるのは楽しい。」と感じられるよう、児童の実態に合わせて工夫した道德授業の実践を重ねていきたい。そして、失敗を恐れずに挑戦していこうとする児童の姿に結び付けていきたい。

3 研究主題

よりよい生き方を実践する力を育む道德教育の充実
ー地域の特色を生かした道德教育の推進ー

4 研究のねらい

「自分と違う意見について考えるのは楽しい。」と言える児童を増やすために、自分の考えを深めたり、話し合ったりすることのできる授業実践を重ねていくことが必要であると考えます。

そこで、外部講師を招聘し、よりよい道德の授業を行うために必要な教材研究や指導・評価の方法について校内研修を行い、道德の授業力向上を図っていく。

また、本校の教育目標と児童の実態を踏まえ、道德教育の全体計画・全体計画の別葉・年間指導計画を見直し、学校全体の道德教育の充実も目指していく。

さらに、道德の授業の中で考えたことを、家庭や地域の中で活用できるようにしていきたい。そのために、保護者やPTA、地域の方との連携による取組を積極的に推進していく。

5 研究の概要

(1) 研究の仮説

仮説①

道德教育の見識を深め、「特別の教科 道德」の授業力向上に努め、また、家庭や地域と連携しながら進める道德教育について、指導・助言を受け、理解を深めることで、児童は対話を通じて多様な価値観に触れ、自己肯定感を高めながら生き方を深く考えることができるであろう。

仮説②

「特別の教科 道德」の授業公開や親子で考える道德を通して、児童が多様な視点から自己の生き方について深く考え、道德教育の取組を家庭や地域と積極的に共有して連携することで、できたことを認められる機会が増え、児童は達成感を味わうことができるであろう。また、家庭や地域での活動を道德的実践の場とすることで、よりよい生き方を実践する力を育むことができるであろう。

(2) 研究の手だて

仮説①に対する手だて

- ① 考え議論するための児童の対話力向上
 - ・ 質問の技カードを活用したグループアプローチの実施
 - ・ まるっと道德の実施
- ② 授業力の向上
 - ・ 岐阜聖徳学園大学教授 山田貞二先生による研修会の実施
 - ・ ホワイトボードを活用した教材分析の実施
- ③ 道德単元構想力の向上
 - ・ 全体計画の別葉と一枚ポートフォリオの活用
 - ・ 評価ウィークの設定

仮説②に対する手だて

- ① 家庭と学校との道德連携
 - ・ 評価ウィークにおける一枚ポートフォリオへの保護者からのコメント記入
- ② 家庭や地域との道德連携
 - ・ 家庭や地域で見つけた道德面での成長を「子どもほめほめメッセージ」として学校へ送信依頼、校内での掲示
 - ・ 地域のゲストティーチャーを招いた道德授業の実施
- ③ 「親子道德」の設定
 - ・ 親子で語らう道德授業の実施

(3) 成果の検証方法

- ・ 愛知県教育委員会が作成する意識調査を事前（6月）と事後（12月）に実施し、検証を行う。
- ・ 学期ごとに児童への「道德アンケート」を実施する。「自ら進んで話すことができたか。」や「友達の意見を聞いて、自分の考えが変わったか。」、「道德の授業で考えたことを、今後の生活に生かそうとしているか。」などの項目を立てて実施し、検証を行う。
- ・ 授業での意見や振り返りなどから児童の考えを把握し、検証を行う。

(4) 成果の普及

- ・ 学校だよりや学校ホームページ等で保護者や地域に発信する。
- ・ 実践の内容を、年度末にまとめ、市内の小中学校へ情報共有する。
- ・ 愛知県道德教育総合推進サイト「モラルBOX」に実践内容を公開する。
- ・ 愛知県道德教育パワーアップ研修会に参加し、実践内容を発表する。

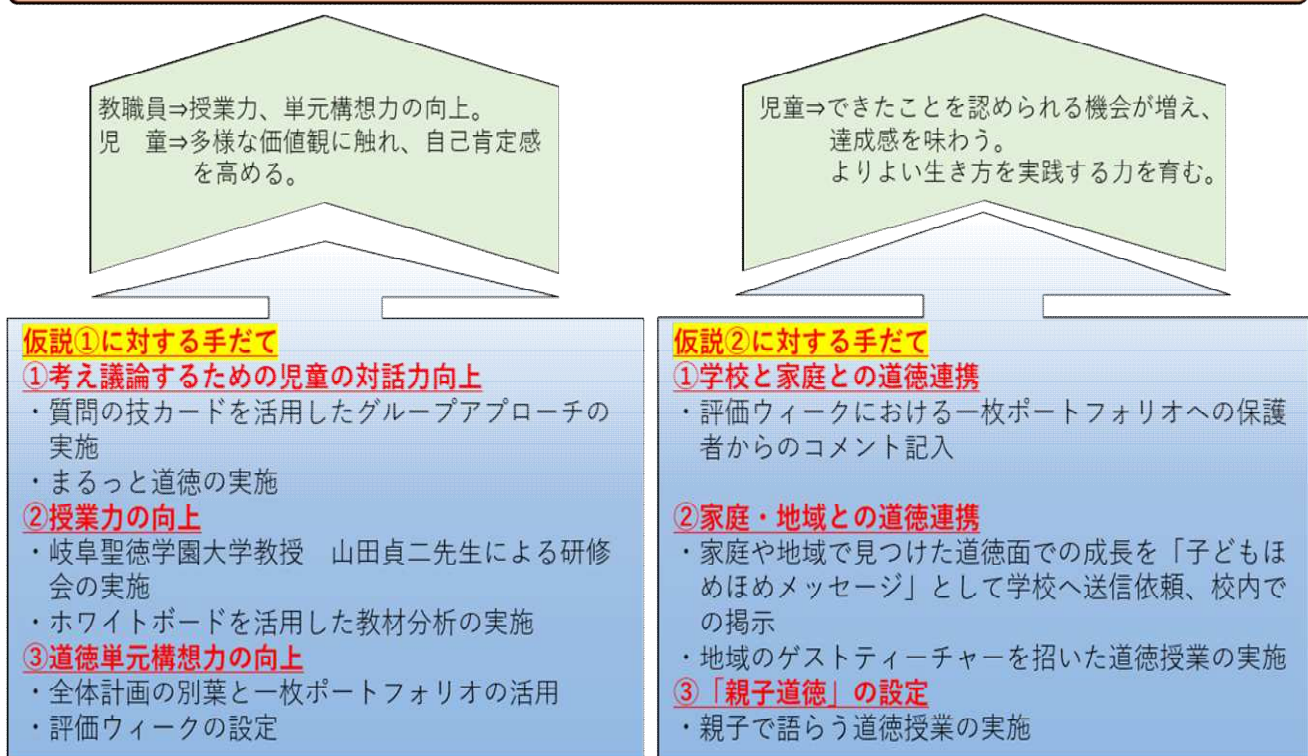
6 研究計画

月	実施内容	備考
4月	・ 研究組織作り ・ 研究の方針、手だて等の検討 ・ 道德教育の全体計画、全体計画の別葉、年間指導計画の検討	
5月	・ 児童・教員の実態把握（校内作成アンケート） ・ 外部講師による示範授業・研修会①	外部講師招聘
6月	・ 意識調査（県教委作成アンケート） ・ 指導案検討会①	

7 月	・授業研究及び協議会①	外部講師招聘
8 月	・外部講師による研修会②	外部講師招聘
9 月	・指導案検討会② ・外部講師による示範授業・授業研究及び協議会②	外部講師招聘
10 月	・指導案検討会③	
11 月	・授業研究及び協議会③ ・道徳授業の公開（学校公開日） ・振り返りの実施（校内作成アンケート）	外部講師招聘
12 月	・校内研修（2学期の振り返り） ・意識調査（県教委作成アンケート） ・事業報告作成	
1 月	・事業報告書提出	
2 月	・成果と課題の確認、次年度の計画 ・道徳教育全体計画、全体計画の別葉、年間指導計画の見直し	

7 研究構想図

よりよい生き方を実践する力を育む道徳教育の充実



本校児童の実態

低学年⇒友達の意見を聞いて考えを広げられない

中学年⇒家庭・地域や友達からほめられる経験が少ない

高学年⇒クラス全体での話し合いが進まない

教職員⇒授業づくりへの自信がなく、家庭や地域との連携を意識した授業を行うことへの意識が低い

8 実践内容

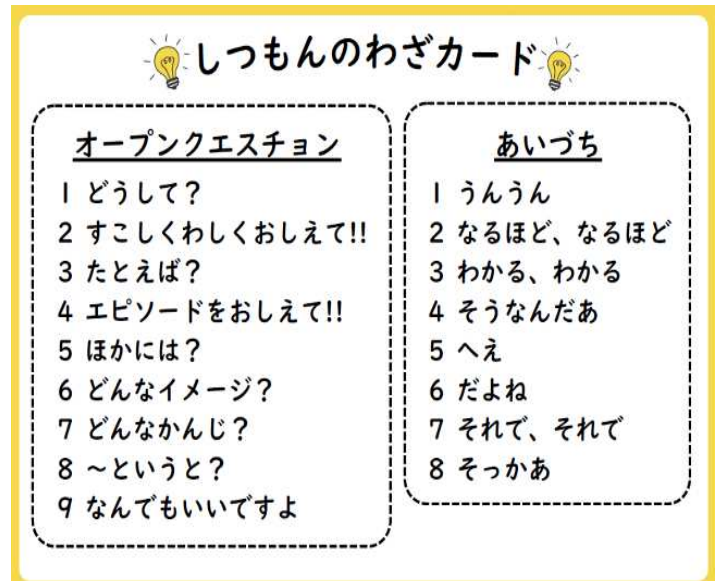
(1) 考え議論するための児童の対話力向上

① 質問の技カードを活用したグループアプローチの実施

本校では、構成的グループエンカウンター（S G E）やソーシャルスキルトレーニング（S S T）を継続的に行い、自己理解や他者理解を深めたり、挨拶の仕方や話の聞き方などの定着を図ったりすることで、共感的な人間関係を育むことを目的として、グループアプローチを年間8回行っている。

「二者択一」「アドジャン」を行い、前半部分は、お題に対する答えを言うだけにし、後半は、前半部分に得たグループの人の情報をもとに、もっと聞いてみたいことについて「質問の技カード」を参考にして質問をさせた。話をしっ

かり聞くために体と顔を向ける「姿勢」や相槌を打つといった「態度」などの育成を図るS S Tの部分と、聴いたことをもとに更に詳しく質問することで、他者理解を深めるといったS G Eの部分意識できるようにすることで、児童の対話力向上を図った。



【質問の技カード】

② 「まるっと道德」の実施

小さな道德とサークル対話の手法を活かした「まるっと道德」を実施した。全員が互いに顔を見合わせられる円形になり「全員が対等な立場にある。」という意識を共有し、率直な意見交換や対話の土台とすることで、安心感をもって発言できる教室環境（心理的安全性）を構築した。また、発言するだけでなく、仲間の意見にしっかりと耳を傾け、その人の考えや立場を理解することで、自分の考えを整理するとともに、仲間の考えに共感する様子が見



【「まるっと道德」で対話をする児童】

られた。このように、自分の考えを言葉にして伝える経験と、多様な意見を聴く経験を通して、自己理解と他者理解を深化させることができた。

(2) 授業力の向上

① 外部講師による研修会の実施

岐阜聖徳学園大学教授の山田貞二先生を外部講師に招き、5年生を対象に「バスと赤ちゃん」の教材を活用した示範授業をしていた。全教職員が参観し、「対話」を中心とした「考え、議論する道徳科の授業」への足がかりとすることができた。意見を次々と発表する「コミュニティボール」や心のバランスを表す「心情メーター」など、子どもたちの意見を出しやすく「見える化」する工夫や、対話が生まれやすい机の配置の工夫、構造的な板書の仕方、発問のつくり方など、これからの授業づくりの基盤となる研修会となった。



【山田貞二先生による示範授業】

また、2学期には4年生を対象に「私に宇宙のプレゼント」の教材を活用したゲストティーチャーを活かす道徳科の示範授業を全教職員で参観した。ゲストティーチャーをどの教材で活用するとよいのか、授業のどの場面でどんな話をしてもらうと子どもの心が揺れ動くのかなど、授業者一人では得られない価値への迫り方を学ぶよい機会となった。さらに、道徳部会と該当学年の職員で指導案検討会を行い、作り上げた指導案で代表者が研究授業を行い、その授業に関する協議会を行った。協議会後には、指導案の分析と授業の実践を踏まえた対話型の研修の時間を持ち、職員も納得解を得ながら学ぶことができた。

② ホワイトボードを活用した教材分析の実施

指導案検討会では、ホワイトボードを活用して教材分析を行った。検討会を3回に分け、第1回は教材研究と発問づくり、第2回は授業構想や板書計画・ゲストティーチャーの活用法の検討、第3回は模擬授業後に検討を行った。

ファシリテーターが会を進め、記録役は参加者の発言を記入し、それぞれのテーマについての考えを繋いだり、深化させたりすることができた。参加者にとっては自分事として授業案を考えることで教材分析力や授業構想力の向上に繋がった。また、研究授業を行う者にとっても、過度な負担を強いることなく、様々な考え方や意見を取り入れながら授業案を構築することができた。



【ホワイトボードに記録した検討内容】

(3) 道徳単元構想力の向上

① 全体計画の別業と一枚ポートフォリオの活用

全体計画の別業を職員室壁面に常時掲示し、道徳を要とした他教科の内容等を閲覧できるようにした。これを活用して、学校行事や総合的な学習の時間と道徳を計画的に取り入れた小単元を構成し、一枚ポートフォリオ評価シートを作成した。道徳の授業を1時間で終わらせるのではなく、道徳の授業を要として複数時間の振り返りを蓄積することで、児童は単元を通しての学習前後の考えを比較し、自己の成長を客観的に捉えることができた。また、教師にとっては児童個々の道徳性が成長する軌跡をスムーズに見取ることができ、評価に活用することができた。

【行事と関連付けて題材を配置した全体計画】

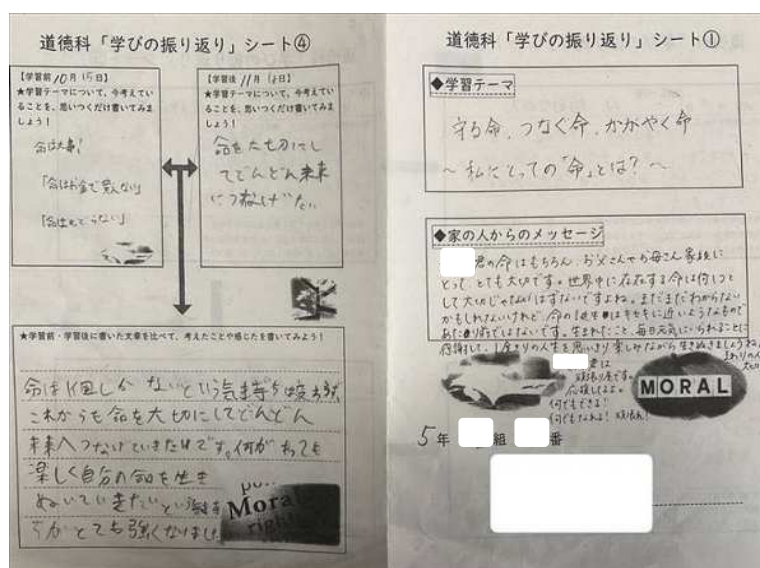
(4) 家庭と学校との道徳連携

① 一枚ポートフォリオへの保護者コメント記入

個々の内容項目ではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた児童の成長を可視化できるよう、パッケージ型ユニットを組み、児童の成長が一目で分かるよう一枚ポートフォリオを作成した。また、毎学期行っている道徳ファイルの持ち帰りの際、保護者に一枚ポートフォリオへのコメント記入を依頼した。

一枚ポートフォリオを活用した学校と家庭との連携により、学校と家庭との間で児童の道徳的成長を可視化し、学校での学びを一方的に伝えるだけでなく、家庭からのフィードバックを引き出し、双方で児童の道徳性を育む協働体制を築くことができた。

保護者からのコメント内容として、各家庭で養われた道徳的価値観を児童に伝える内容が多かった。学校での学びが家庭へ持ち込まれ、親子の対話を通じて道徳的価値の理解がより深まったことが読み取れる。また、児童の学習内容や内省に触れ、道徳的価値を家庭の視点から再確認・補強することができ、肯定的な



【保護者からのコメントが書かれた一枚ポートフォリオ】

メッセージは、児童の自己肯定感を高めることにつながった。

(5) 家庭・地域との道德連携

① 家庭や地域で見つけた道德面での成長を認める「ほめほめメッセージ」

学校行事や家庭・地域での生活の中で、小正小学校の児童が見せた道德的な面でのよい言動（例：優しさを見せたなど）を見つけた際に、そのエピソードや温かいメッセージを学校に報告してもらった。実際に集まったメッセージを学校の昇降口に設置した掲示板に掲示し、児童のよい言動や温かいメッセージを全校で共有した。

家庭や地域で見られた児童の道德的成長を感じられる言動に対する肯定的な関心を広げ、情報共有を図ることができた。

寄せられたメッセージは、家庭内や通学団で優しくしてあげた場面など具体的なエピソードに基づいており、児童の自己肯定感を高め、道德的实践意欲を高めることにもつながった。学校・家庭・地域が連携して望ましい行動を育む文化を醸成することができた。



【昇降口に掲示したほめほめメッセージ】

② 地域のゲストティーチャーを招いた道德授業の実施

授業研究として、ゲストティーチャーを活用した授業を行った。3年生を対象に「二つの祭り」の教材を活用し、地域の祭りである「国府宮はだか祭」に焦点を当てて授業を展開した。長年にわたり「国府宮はだか祭」に裸男として参加した経験のある地域の方をゲストティーチャーとして招き、授業の様々な場面で意見をもらいながら話し合いを進めた。



【地域のゲストティーチャーを招いた道德授業】

ゲストティーチャーの体験談や当時の思いを直接聴取したことで、児童は教科書や教師の説明だけでは得られない現場の熱意や、伝統の尊重、協力、郷土愛といった道德的価値が地域社会の具体的な営みに根ざしていることを実感的に捉えることができた。さらに、授業の様々な場面でゲストティーチャーが意見を伝えたことは、話し合いを多角的な議論へと導き、児童が多様な視点や価値観に気付く機会を創出した。そして、教材への関心度を高め、道德的な思考力・判断力を

育成し、深い学びにつながった。

(6) 親子で語らう道徳授業の実施

11月の学校公開日に全学級道徳の授業公開を行った。各学年や学級の実態に合わせ「生命」や「家族愛」など、親子で話しやすいテーマを選択し、保護者参加型の授業を展開した。

題材に応じて、子ども目線と大人目線で違いが感じられる場面を事前に出して発問し、話し合い活動に保護者に参加してもらった。親子で率直に道徳的価値について語り合う貴重な機会となった。児童は、親のもつ

多様な価値観や人生経験に基づく意見に触れ、それまでの自分の考えを広げたり、多角的に検討したりする思考の深化を図ることができた。保護者は、授業で子どもの道徳的な考えや様子を知ることができた。



【親子で語らう道徳授業の展開】

9 成果と課題

校内アンケートを行った結果は下記の通りである。

(事前・事後の％は、「そう思う・どちらかといえばそう思う」を合わせた％)

分野	対象	質問内容（成果に関連する問い）	事前	事後
① 対話力	小2	友達の考えを聞くのは楽しい	78%	85%
	小3・4	友達の意見を聞くのは楽しい	85%	88%
	小5・6	友達の意見を聞いて考えを深める	85%	88%
	教職員	安心して発表できる雰囲気づくりを意識している	93%	100%
② 授業力	小2	考えを深めるため積極的に参加している	85%	89%
	小3・4	考えを深めるため積極的に参加している	92%	95%
	小5・6	考えを深めるため積極的に参加している	87%	88%
	教職員	道徳科の評価を工夫（一枚ポートフォリオ等）している	46%	89%
③ 家庭・ 地域連携	小2	先生や地域の方は自分達を大切にしてくれている	87%	89%
	小3・4	先生や地域の方は自分達を大切にしてくれている	90%	94%
	小5・6	先生や地域の方は自分達を大切にしてくれている	92%	93%
	教職員	家庭・地域との連携を意識した道徳教育が進められている	44%	92%

アンケート結果を分析すると下記のような成果が考えられる。

① 児童の対話力の向上：「心理的安全性の醸成と聴く姿勢の定着」

「質問の技カード」の活用と「まるっと道德」の実践が、全学年の「対話をすることの楽しさ」の向上に直結したと考えられる。特に小2のアンケートの伸びは、低学年からの基盤づくりが成功したことを示している。教職員も「安心して発表できる雰囲気づくり」を意識したことで、心理的安全性が確保された環境の中で、道德の授業づくりをすることができた。それにより、発言をつなげてより深く対話をしていく力が数値として向上したと考えられる。

② 教職員の授業力の向上：「示範授業とホワイトボードを活用した教材分析」

外部講師による示範授業や、ホワイトボードを活用した多角的な教材分析・指導案検討会を行ったことで、発問を分類したり、心情曲線を分析したりした上で指導案を検討することができ、道德授業の質が高まった。さらに、道德科を単元として捉える一枚ポートフォリオの活用により、児童の変容を可視化し、適切な評価へとつなげる体制が整った。

③ 家庭や地域との連携：「リアリティのある学びと自己肯定感の向上」

教職員の「地域と連携する意識」が48%増加し、外部連携しようとする体制が確立された。これに伴い、全児童が「地域から大切にされている実感」が高まったと考えられる。また、一枚ポートフォリオへの保護者コメントや、家庭・地域でのよさを学校に伝える「ほめほめメッセージ」の取組は、児童の自己肯定感を高めることにつながった。

地域の祭りに携わるゲストティーチャーを招いた授業や、親子で語らう道德授業の実施は、教科書のみでは得られないリアリティのある価値観に触れる機会となり、児童の思考を多面的・多角的なものへと深化させた。

課題としては下記の3点が挙げられる。

① 「考え議論する道德」の充実

アンケート結果では全学年で「聴く楽しさ」が向上した一方で、小2や中・高学年の一部で「自分の意見を発表している。」という自己評価に伸び悩みが見られる。これは対話の質が高まったことで、児童が自分の意見をよりよく伝えようと慎重になっているからだと考えられる。今後は、思考ツールを活用して考えを可視化したり、小グループでの対話の機会を確保したりするなど、道德的価値を分析的に捉えて対話をし、より考え議論する道德の足場かけを一層強化する必要がある。

② 「自分自身の生き方」へ繋げる終末の工夫

まるっと道德の実施やゲストティーチャーの招聘により、多様な考えに触れることができたが、それを自分なりの納得解に落とし込む「深まり」に課題が残った。授業の終末において、対話で得た気付きを自分の生活や未来と結び付ける「自己との対話」の時間を十分に確保し、心の葛藤から自己の生き方への納得解が得られる授業づくりが求められる。

③ 一枚ポートフォリオを核とした次の学びへ繋げる工夫

教職員の評価意識と地域連携の数値は向上した。次年度は、一枚ポートフォリオに蓄積された児童の変容や家庭・地域からのメッセージを、いかに児童本人の自己肯定感や次の学びへの意欲に繋げるかが鍵となる。評価を「教師がつけるもの」から、児童・教師・家庭が「共に成長を語り合うためのツール」として日常化していく体制づくりをしていきたい。